

お祖母さんはオハゲロをつけてゐられた。錆びた鐵の鉢には見るからにきたらしい液體がはいつてゐたやうである。曇つた鏡を又木になつた鏡掛に載せて、丹念に齒を染めてゐられた。また時々糸を紡いでゐられた。片手で車を廻しながら、プーイ、プーイと手つき良く竹の管に糸を巻いてゆかれるところ、また糸の先を一寸なめて管に投げつけられる手際なき、私は感心して見入つたものだつた。もうあのやうな昔の様は見られなくなつて了ふのであらう。これから後の世のお婆さんの仕事さいふのはこんなことになるのかしら。田舎では、まだ昔のまゝの日常生活が残つてゐればいゝが、そんな風に變つたのか今の私には想像もつかない。

### おやいと

私は今之を書きながら、右の食指の第二節にある灸の跡を見てゐる。これが何時の頃の記念のものか、想ひ出さうと、なかなか想ひ出せない。大洲に来る前、村の舊校舎の前の、貧しい人の子供に石をぶつけて逃げて歸つたところがある。舊校舎は製茶場であつた。私は今春、牧野原の茶園を見學した時、あの茶の強い香の中で、屈強な人々が茶をもんでゐるのを見て、今迄つひぞ想ひ出したこともなかつた幼時の或る日をふと想ひ出した。即ち舊校舎で村の若い男女が威勢よく働いてゐる光景がまざまざと蘇つて來

た。と同時に、舊校舎の角の家の子供に石を投げつけて、母親に怒鳴り込まれた夕べの恐しさをも想ひ出した。しかし、この時母は、いとも恐縮して謝罪してゐられたが、お灸はすえられなかつた。するさ、やはり、大洲の母から頂戴した貴重な形見であらうと思はれる。あゝこの人差指のやいさ！大聲で泣きわめく男の子を押へつけて、お祖母さんが引止めるのもかまはず、殘酷なことを敢てせられた第二の母！あの優しかつた母も今は此の世には在さず、やいさの跡を見てゐるこそゞろに淋しさがこみ上げて來る。

(つゞく)

### 世界中で唯一人

美しい空の何百さいふ星

濱邊に集まる何百さいふ貝

歌つて過ぎる何百さいふ鳥

晴れた日に飛ぶ何百さいふ蜂はち蜜

夜明けを迎へる何百さいふ露

紫のクローバの中の何百さいふ仔羊

芝生の上の何百さいふ蝶

けれども世界中でかあさんは唯一人

——チヨーチョークローバ——